

## ヤスクニ・レポ 209

# アジアは侵略・加害の事実を忘れないー私たちはどうあるべきか

代表 西川重則

1

戦後七二年の今年も、〈二・一一〉集会の講師として「改めて日本国憲法に習熟しよう」と題し、参加者の皆さんと学び合った。貴重な三時間近い憲法学習の時だった。日本国憲法と自民党の「日本国憲法改正草案」と比較しながら、日本国憲法のすばらしさを報告した。ちらしに書いておいた一部を記せば次の通りである。

「自民党が結成され一九五五年一月一日に『党の基本方針』として『現行憲法の自主的改正』を主張したことは、二〇一七年の今日、日本国憲法の改正を当然視している明白な予告だったでしょう。

私たちが日本国憲法に習熟し、普遍的価値を持っている『個人の尊重』(一三条)を民主政治の本質とする憲法政治を強く要望しましょう。

そして、地方自治の本旨(九二条)、憲法尊重擁護の義務がすべての公務員に負わされている(九九条)憲法の条文・精神を重視すべき事を確認し、学びを深めましょう」。

ご存じの通り、〈二・一一〉集会は、キリスト者の場合、全体的に開催されたと思っている。私の所属する教会においても尊敬する講師によって〈二・一一〉集会が開かれた。心から感謝している。今年の二〇一七年がどんな年であるかを考える時、

〈二・一一〉集会に参加された人々は、その集会に参加されたことによって、日本の政治状況の厳しさが知らされ、共に新たな戦いの責任と課題を教えられたことでしょう。私の場合は私が住んでいる所で講師としての具体的な責任課題を学び合い、今年の厳しい政治の現実を直視し、共なる戦いを心に刻み、学び合いによって、率直な発言がなされ、講師の私も多くのことを教えられ、心から感謝したものである。

日本国憲法をよく学び、習熟することは決して易しいことではないからである。それどころか、私が

常に反省しているように、日本の近代史、現代史を学ぶことによって、アジアの国々に対して何をしたのか、その歴史の事実が戦争であり、しかも日本が常に正しいこと、相手の国が常に間違っていると断定することに何の疑いも抱かず、日本は聖戦、従って自衛戦争の戦争であり、勝利は当然と教育され、戦場に派兵され、名誉の戦死、戦病死という結果、靖国神社の「英霊」として合祀されているという驚くべき発想、天皇制・国家神道体制の下、反省もしないまま敗戦の日を止むなしと考え、戦後七二年の今も、戦没者遺族が靖国神社の参拝をするといった具合である。

私たちが今日日本の戦後の歴史をどう考えて、具体的にどう認識しているか、非常に重要な諸問題を真剣に考え、反省し、アジアの視点に立って、正しいアジアの歴史認識を共有するかが厳しく問われていることを強調しておきたいと思っている。

2

以上のことを深く反省する私にとって、安倍首相や稲田防衛大臣などがアメリカに行って、何を考え、どんな政治を具体的にこなそうとしているのか、私たち主権者・有権者が為政者に対し、どんな警告をすべきなのか、それこそ私たちの緊急課題ではなからうか。稲田防衛大臣が先日帰国して、靖国神社に参拝したことが報じられ、「朝日新聞」が社説で率直に批判をしたのは自明のことと言わねばならない。

靖国神社公式参拝問題は敗戦後、日本国憲法の第二〇条の信ずる自由、信じない自由および政教分離の原理・原則、解釈、適用について戦後七二年の今日に至るまで根本的に解決していないことは多くの日本人によく理解されていないだけに、二一世紀の今日にあって、国家権力者の発想で知られているように、戦前・戦中の天皇制・国家神道体制下に思いを馳せ、戦前回帰現象を当然視する状況が今日も見られるのは止むを得ないのかも知れない。とにかく

そうした靖国神社の消しがたい思想が今もなお続いている日本社会の通念が問題にされない推進運動が定着していることは否定されない。いわゆる日本会議や英霊にこたえる会などが八月一五日に靖国神社の大鳥居のある境内で大集会を開き、首相経験者も招かれ、そうした靖国神社の英霊尊崇の思想が強調されていることを、私は直接聞いているだけに、アジアの視点に立って、靖国神社の「英霊」尊崇運動の根絶がいかに難しいかを痛感させられる昨今である。

そうした思いを持つ私にとって、戦後七二年の二〇一七年の年がいかに厳しい年であるか、どうすれば克服できるかを集会その他の訴えによって、共に考え、学びを深め、具体的に日本の社会通念を変革する責任課題の重要性を改めて心に深く抱く私である。

そうした現状にあって、安倍首相や稲田防衛大臣がアメリカに行き、何を考え、今後何をしようとしているのか、私たちの立場からどうすべきかについて真剣に考え、反省をしないわけにはゆかないのである。

私がアジアの視点に立って日本のあり方を考え、

社会通念の変革を重要視し、具体的に訴えたいと願っているのはなぜなのか、改めて共に考えて見たいものである。

そうした思いから、安倍首相や稲田防衛大臣がアメリカに行くことに何の疑問も抱かないのはなぜなのか。なぜ日米安全保障の名の下に、日米軍事同盟強化路線の具体化を考えるのか。そしてその一方では、中国や韓国について歴史の事実に基づく歴史認識の共有を真剣に考えないのか。その最大の理由は、安倍首相や稲田防衛大臣など閣僚がアジアの国々、とくに中国、韓国などに対して長きにわたって侵略・加害の歴史をくり返したにもかかわらず、自ら日本人として恥じることなく悲惨な戦争の惨禍を強いられた人々に出会っても直接謝罪の思いを述べることをしないだけでなく、アジアの視点に立って中国人や韓国人が戦争の悲惨さを強いられたことの痛み、悲しみ、憤りに思いを馳せることがないのである。戦争絶対反対、憲法改正(改悪)絶対反対を叫ぶなかでアジアの視点に立って考え、学び、実践する私たちでありたいと願い、終わりたい(二〇一七年二月一五日)。

## 2017年1月20日例会奨励 使徒の働き12章1～5節「神に熱心に祈り」 星出 卓也牧師 (日本長老教会西武柳沢キリスト教会)

ヘロデがエルサレムの教会を迫害し、指導者である使徒ヤコブを剣で処刑し、続いてペテロを捕えた、この「そのころ」(1節)とは、ユダヤ人ではない異邦人たちが教会に加えられていった時期です。割礼を経ずして異邦人が異邦人のままで神の民として加えられたことに対して、ユダヤ民族の伝統と誇りが損なわれる事態として民衆の非難が上がったのです。ヘロデはこの機に乗じて、ユダヤの民衆の支持を得るために、エルサレムにいるクリスチャンたちへの弾圧をはじめました。ヘロデの思惑通り、使徒ヤコブを処刑したことは「ユダヤ人の気に入った」(3節)のです。ヘロデは更なる民衆の支持を得るため、キリスト者の群れを散らそうとします。

使徒の働きの中で「教会・エクレーシア」という言葉は、実はそれほど頻繁には出てこず、1節の「教会」の言葉はこの書の中で5回目に過ぎません。「エクレーシア・呼び集められた者たち」の言葉は特別な意味を表す時に登場します。「呼び集められた」という言葉は、「呼び集めた方」の存在を前提にしています。呼び集めた方とは、他でもない神です。です

から教会という存在は、集められた人間たちだけを見たのでは捉え尽くすことができません。

しかし、ヘロデは、彼らと呼び集めた方を知らなかったのです。もし彼らが仲間同士の絆だけで結ばれた群れであったなら、彼らを散らすことは簡単だったでしょう。ヘロデは、群れの指導者を打てば、簡単に群れを散らすことが出来ると考えて、ヤコブに続いてペテロをも処刑しようとしてしました。しかし「呼び集められた者たち」は、ヘロデには見ることができない方を、この時にしっかりと注目していたのです。

「教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。」(5節)とある通りです。

教会とはこのような存在です。呼び集められた者たちは、呼び集められたお方を良く知っていたのです。今日もキリストによって呼び集められた私たちもまた、どのような困難の事態の中にあっても、私たちを呼び集めた方を知り、この方に信頼し、この方に求めることを知っている。それが教会であると教えられたいと思います。